

自然博物館
ニュース

A・MUSEUM

vol.60
[2009.9.15]



ミュージアムパーク
茨城県自然博物館



成長した木々に囲まれた博物館



開館間もない頃の博物館

成長する博物館

当館は平成6年11月13日の茨城県民の日に開館し、今年で15周年を迎えることとなりました。その間、常設展示のリニューアルを行うことはもちろん、56回におよぶ企画展、特別展を開催してきました。しかし、変化しているのは館内展示だけではありません。左の写真は開館間もない頃の風景で、上の写真は同じ場所を最近撮影したものです。館を取り囲む木々が見事に成長していることがおわかりいただけることでしょう。開館ときに植栽された木々が、今では館を覆い隠すほど大きくなり、その間を鳥や虫たちが飛び交い、まさにミュージアムパークの名にふさわしい姿となっています。内外ともに成長し続ける当館にぜひお越しく下さい。

(企画課 石川 悟)

開館15周年記念
第47回
企画展

わんだふる・ベジタブル

-野菜王国がやってきた- The Wonderful World of Vegetables

私たちが日常的に食べている野菜は、いったいどこからやってきたのでしょうか。

例えば、カブやキャベツなどのアブラナ科の野菜は、地中海地方原産のものが多く、その原種のかたちは、現在のカブやキャベツとはかなりちがうものでした。カブの地下部が大きくなったり、キャベツが丸く結球したりしたのは、長年にわたる品種改良の結果です。そして、これらの野菜は世界中に広がっていきました。また、カブは、日本に伝来した後、コマツナやノザワナなどに変化していきました。

このように、それぞれの野菜には原産地があり、その多くは外国からやってきました。そして外国から日本へと伝わり、今にいたるまでの間には、野菜と人がともに歩んできた歴史があり、私たちの生活になくはない存在となっています。

今回の企画展では、これらの野菜を、多様性やその起原、日本や茨城県での現状、最新の栽培技術など、

さまざまな面から紹介します。

この企画展をとおして、身近な存在である野菜を、今までとは少しちがった角度から見直していただき、より魅力あるものとして感じとっていただけたら幸いです。
(資料課 国府田誠一)

展示構成

第1部 野菜とは

野菜の種類やからだのつくり、花などを紹介します。

第2部 野菜の起原

野菜の起原について、原種や近縁種の標本などで紹介します。

第3部 日本の野菜

日本の地方野菜や野菜に関連した祭りなどを紹介します。

第4部 野菜と虫

野菜と関係の深い益虫や害虫を紹介します。

第5部 茨城県と野菜

茨城県の主要野菜や昔から栽培を続けている地域特産野菜などについて紹介します。

第6部 野菜のこれから

植物工場やイチゴの高設栽培など、最新の野菜栽培について紹介します。



アサガオの花に似たサツマイモの花



花びら4枚が特徴のカラシナ原種の花



加賀野菜の一つ打木赤皮甘栗かぼちゃ(うつぎあかがわあまぐりかぼちゃ) (提供:金沢市農産物ブランド協会)



トマトの受粉に利用しているセイヨウオオマルハナバチ (提供:社団法人日本植物防疫協会)



茨城県の地域特産野菜の一つレッドポアロー



南極の昭和基地にある植物工場(提供:国立極地研究所)

会 期 2009年10月10日(土)～2010年1月11日(月)

開館時間 午前9時30分～午後5時まで(入館は午後4時30分まで)

休 館 日 毎週月曜日

※10月12日(月)・11月23日(月)・1月11日(月)は開館し、翌日が休館。

※12月28日(月)～1月1日(金)は休館。

●自然講座「野菜ってなんだろう」

日時:10月10日(土)14:00～16:00

場所:博物館内

対象:小学4年生以上

定員:250名(先着順)

講師:篠原 温氏(千葉大学大学院園芸学専攻科教授)

●自然観察会「茨城県農業総合センター見学会」

日時:10月24日(土)10:00～12:00

場所:茨城県笠間市 茨城県農業総合センター

対象:小学生以上(小学生は保護者同伴)

定員:30名(抽選)

●自然観察会「そうだハス田に行こう」

日時:11月15日(日)10:00～12:00

場所:茨城県土浦市

対象:小学生以上(小学生は保護者同伴)

定員:30名(抽選)

学校への新たな普及事業「はくちょう号」

～博物館がやってくる2～

平成20年度から、学校向けの教育普及事業の一つとして、新たに学校移動教室「はくちょう号」をはじめました。これは前号で紹介した社会教育施設移動博物館の機動性をより高めたもので、茨城県内の小中学校に、当館が収蔵する貴重な資料とともに学芸系職員2名が訪問する事業です。平成21年度は、茨城県内で希望があった5つの学校にお伺いします。

平成6～19年度まで実施していた移動博物館では、茨城県内の小学校・特別支援学校など計47校を訪れることができました。しかし、訪問していない学校が、まだまだ数多くあります。“もっとたくさんの児童・生徒の皆さんに、自然への興味・関心を高めて欲しい”という願いから、学校移動教室「はくちょう号」は誕生しました。その愛称「はくちょう号」には、児童・生徒の皆さんへ、“わくわくするような素敵な体験を、菅生沼に降り立つコハクチョウのごとく翼を広げて届けたい”という思いが込められています。

さて、移動教室「はくちょう号」は、学芸系職員によるレクチャーを中心に、動物の剥製やアンモナイトの化石などのタッチング標本に触れてもらう体験活動を行っています。レクチャーは全部で19種類にわたっており、いろいろな分野にかかわる内容を子どもたち

にわかりやすく楽しく伝えています。「ドンダリの図鑑づくり」「昼間の星の観察」「クマの毛皮にタッチング」などのメニューのなかから、実施校の対象学年にあわせて2種類を選択してもらっています。

7月10日には、つくば市立荃崎第二小学校で平成21年度第1回移動教室を実施しました。そして、体験活動として3、4年生には「昆虫の体のつくりの観察」を、1、6年生には「海藻で絵を描こう」のレクチャーを行いました。3、4年生は、世界の珍しい昆虫を見て歓声を上げたり、5mにも伸びる捕虫網やハチなどに刺されたときに毒を吸い取るポイズンリムーバーなど、はじめてみる道具に興味津々のようでした。また、昆虫標本を手にとってスケッチすることで、昆虫の体のつくりに関する知識を深めることができました。1、6年生は、茨城県内で採集された赤色や緑色の海藻を使い、カラフルな海藻のしおりづくりを楽しみました。また、大型海藻のアラメに触ることで、海藻の大きさや海藻の出すぬめり成分を感じてもらえたのではないかと思います。

学校移動教室「はくちょう号」を通じて、たくさんの笑顔に会えることを楽しみにしています。

(教育課 湯原 徹)



昆虫の体のつくりの観察のようす



海藻で絵を描こうのようす

熊の行動調査

6月末に熊の生息・行動調査のため栃木県日光市足尾町を訪れた。

この調査は鉱毒被害で知られる足尾銅山を含む広域的な対象地で、当館の職員が環境省の補助を受け森林総合研究所・大学などとの共同研究により2003年から実施し、今回は上野動物園の職員3名も特別参加した。入山には特別の許可が必要で私達は足尾銅山の旧精錬所近くのとゲートから3台の車に分乗し入山した。周囲の山々を眺めると随所で砂防ダ

ムの建設や植林作業が行われており鉱害の凄まじさを感じた。早朝の観察時には、ニホンカモシカ、シカが目前に姿を現し感激した。崖にへばりつくような細い山道を行くと、熊のような運転者が向かいの山に熊の親子を発見した。メス熊とこの春生まれた2頭の小熊が望見でき長時間観察しても見飽きない。その後、熊捕獲専用の罠を仕掛けた。細かな工夫とその場所の選定には知識と経験の豊かさが感じられた。この罠で

コラム by director SUGAYA

翌日熊が捕獲された。私にとってはきわめてハードな調査への参加ではあったが貴重な体験であった。



イラスト:太田有香(ミュージアムコンパニオン)

科学的体験学習プログラムを実施しています

研究ノート

当館では、理科、生活科等の授業で学んだ内容を確かな学力として定着させるため、実生活と関連づけた体系的な科学的体験学習プログラムを開発し、普及させようという取り組みを進めています。この事業は、国立科学博物館が文部科学省から委嘱を受けて実施しているもので、当館はその事業の「プログラム開発ワーキンググループ」の一員として、近隣小中学校とともに当館及び学校の施設を活用した科学的体験学習プログラムの開発に取り組んでいます。

本年度は、平成19～20年度に開発した「季節の野草でピンゴ!」「土の中の生きものウォッチング」「酸性雨を調査しよう」「プランクトンを観察しよう」「炭焼きを知ろう」の五つのプログラムを当館や学校で実施しています。ここではそのなかで、「土の中の生きものウォッチング」の取り組みについて紹介します。

このプログラムでは、まず、児童・生徒が身近な場所で土の中の生きものを採集し、その生きものをワークシートを使って観察します。そして、土の中の生きものがどんな生活をしているのか、生きものが周囲の環境とどのようにかかわっているのかを理解させるためのものとなっています。

平成20～21年度にかけて茨城県内の小中学校30校

でこのプログラムを実施しました。採集された生きものの割合をみると、ダンゴムシ(41.6%)、アリ(33.8%)、ミミズ(28.3%)、ムカデ(17.6%)、ゴキムシ(14.2%)となりました。学校周辺の環境では、すべての採集地において、ダンゴムシ、アリ、ミミズの順で出現頻度が高いという結果が出ました。

そして、プログラムを実施した30校の児童・生徒と先生方を対象にアンケートを行いました。感想として、「吸虫管を使ったところが楽しかった」(86.8%)、「土の中にたくさんの生きものがあることがわかって驚いた」(77.5%)となりました。先生方は、「普段何気なくみている土の上のミクロの世界をみることできたことは、児童・生徒にとってとても貴重な活動だった。」「土の中の生きものは、身近な自然環境をみる上で有効であると感じた。」でした。改善点としては、「使用するにあたっての解説書の添付」や「より多くのサンプル標本の提示」「画像などの資料の提示」などが出ています。

今後も、アンケート結果の分析を進めて改善を加え、プログラムの積極的な活用を推進するとともに、心に残る科学的体験学習が展開できるプログラムを提供していきたいと考えています。(資料課 湯本勝洋)



学習プログラムに取り組んでいる児童の様子



プログラムに使用する学習キット

シフゾウはゾウじゃないゾウ!

皆さんは第46回企画展「姿なき化石」を、ご覧になりましたか。たくさんの動物たちが残した生活の跡をたどることは、ドキドキしてしまう体験です。私は、そのなかにある「シフゾウ」という動物が残した足跡に、注目しました。

シカのような角をもちながらシカではない。ウシのような蹄をもちながらウシではない。ウマのような顔をもちながらウマではない。ロバのような尾をもちながらロバではな

い。このように四つの動物に似た特徴をもちながら、そのどれとも違うことから「四不像」とよばれています。体はシカよりも少し大型で、湿地にすんでいたため、とても幅広の蹄を持っていて、足跡はまるでキリンのように大きいです。日本では、大阪府と石川県で足跡化石が見つかっています。

野生のシフゾウは絶滅してしまいましたが、飼育されていたものの子孫を、現在でも動物園などでみるこ

小さな発見—ミュージアムコンパニオン—

とができます。
(ミュージアムコンパニオン 太田有香)

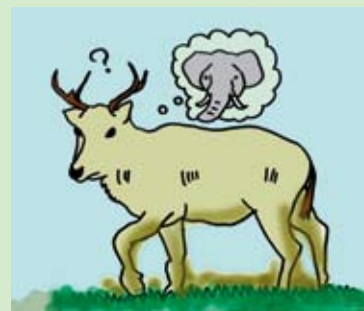


イラスト:太田有香(ミュージアムコンパニオン)

皆既日食 in 屋久島

研究ノート2

2009年7月22日、世界天文年である今年の大きな天文現象の一つ、皆既日食がありました。日本の陸地で皆既日食を観察できるのは九州地方の種子島南端から奄美大島北部までの地域でした。

私は屋久島に渡りました。そこで、だんだん細くなる太陽、太陽がすべて覆い隠される直前と再び現れたときに起こるダイヤモンドリング、4分もの間黒い太陽とその周りに輝く淡いコロナなどさまざまな妙なる現象を観察してきました。と報告したかったのですが、屋久島をはじめ日本の多くの地域では太陽をみることもままならない生憎の天候となっていました。

この悪天候の中、私の宿泊したホテルのある島の北東部が、日食をみられる確率が一番高いという予想から、継続時間の長い南部を諦め、そこを観測場所を選択し、日食の開始を待ちました。

日食が始まる時間になっても厚い雲に覆われたまま、太陽はなかなか顔を出しませんでした。それでもいつ太陽が出てもいいように機器のセッティングをし、ホテルの屋上で太陽の出現を待ちました。ようやく2割ほど欠けた太陽が雲越しにみえ、皆既日食への期待が膨らみました。しかし、その光は弱く用意した遮光板をとおすと何もみえないほどでした。引き続き

太陽が雲に隠れた状態で、皆既日食を待ちました。

太陽はみえなくても、空がだんだんと暗くなり、皆既日食のはじまりが近づいたことがはっきりとわかりました。その後いよいよ私たちの周りが暗くなり、皆既日食のはじまったことが実感できました。島の北東部は皆既帯の北の外れに近く、自分たちの上空から南西方向の雲が暗いのに対し、北側の空が明るく、月の影の境界がわかりました。月の影は徐々に西から東へと移動していき、だんだんと西の空が明るくなり、暗い空は東へと移っていきました。そして再び私たちの上空が明るくなり、太陽のみえない皆既日食が終わりを迎えました。ほんの数分で空は何事もなかったかのように普段の顔に戻りました。

暗かった時間は2分も続かない本当に短い時間でした。雲に覆われたためコロナなどの現象を観測することはできませんでしたが、部分日食では感じられない実に感慨深い体験をすることができました。

屋久島を訪れたのはもちろん日食の観測が第一の目的でしたが、屋久島の大自然探訪も魅力の一つでした。屋久杉、緑の苔に覆われた森、花崗岩、ウミガメの産卵と素晴らしい自然が残された屋久島は、何度でも訪れたいと思うところでした。（教育課 木村正和）



雲越しにみえた上部が欠けはじめた太陽



屋久杉（二代大杉）

ヒトデはお星様？

ヒトデと聞いて星の形をイメージされる方も多いと思います。多くの種類は5本の腕をもち、まさしく星形をしています。なかにはイメージとはほど遠い、8本腕のものや50本もの腕を持つ種類も知られています。

種類によって腕の数が違うのは理解できると思いますが、同じ種類でも腕の数が違うヒトデも実は多く知られています。写真はすべて県内の磯で採集された「イトマキヒトデ」

です。標準は5本の腕をもちますが、（写真中央）4本から7本腕までみつけることができました。

なぜこのような形になるのでしょうか。ヒトデは卵からいきなり星形になるわけではありません。全く形の異なる幼生から変態して成体となりますが、要因の一つとして、変態時期の遅れが腕数の変化に影響しているのではと考えられています。

当館の海の水槽では、さまざまな色・形のイトマキヒトデを展示して

おさかな通信

います。腕の数が違うヒトデをぜひ探してみてください。

（水系担当 金高卓二）



イトマキヒトデ

テングギンザメ

展示品・収蔵品紹介

2009年2月6日、茨城県銚田市沖で底曳き網漁をしていた漁船(祥天丸 五来靖彦船長)が水深約490メートルの海底から珍しい深海魚を引きあげました。その名は「テングギンザメ」。まさに天狗のように、吻(上顎の前端から眼までの部分)が長く前に突出した顔をしている魚です。ただし、テングギンザメとはいえ、分類学上はサメのなかまとしては扱われません。私たちが水族館でよく目にする一般的なサメは、体の側面にエラ孔が5~7対ありますが、テングギンザメにはエラ孔が1対しかありません。この形質の違いにより一般的なサメやエイは板鰓類に、テングギンザメは全頭類に分類され、この二つのグループをあわせて軟骨魚類とよびます。日本近海で生息が確認されている全頭類は、ギンザメ科とテングギンザメ科の2科11種であり、そのなかでもテングギンザメはクロテングギンザメとともに1999年になって新たに命名された種です。

テングギンザメの特徴は、なんといっても剣状に前に突出した吻と頭部に発達した溝状の側線系です。その顔は、固い鉄の板を何枚も貼り合わせた仮面をかぶっているかのようにみえます。その他の特徴としては全長が成魚で1m前後、からだは後方に向かって細長くなり、尾鰭の先端は糸状にすらりと伸びます。尾鰭の上側には棘が並んでおり、この棘の有無や数が本種と他の種とを区別するとき重要な形質となります。楕円形の眼は頭の側縁近くにあり、口は頭の腹面にあり眼よりも前方に位置します。骨格は軟骨質で一般的なサメと同じです。

国内の生息域はオホーツク海南端、北海道以南の太平洋、東シナ海の水深300~1100mとされており、相模湾や福島県沖で採集された記録があります。捕獲数が少ないことからその生態にはまだ謎の部分が多くあります。海外ではニュージーランド、オーストラリアの南岸と北東岸、ペルー沖などで補護された記録があります。

5年前には同属のクロテングギンザメが茨城県沖で初捕獲されて話題となりました。今回のテングギンザメも茨城県沖では初記録となります。

捕獲されたテングギンザメは、五来船長が海洋生物に詳しい日立市在住の舟橋正隆氏を介して当館に寄贈していただきました。当館では液浸標本として収蔵し、8月より1階のディスカバリープレイス・茨城の動物コーナーにおいて展示しています。深海より現れた不思議な風貌をもつ魚をぜひご覧ください。

(資料課 増子勝男)



ディスカバリープレイスに展示されたテングギンザメの標本

菅生沼で捕獲されたカミツキガメ

坂東市大谷口にお住まいの飯田実氏より、菅生沼で捕獲されたカミツキガメが当館に届けられました。飯田氏のお話では、菅生沼の反町閘門橋の近くでコイを捕るための袋網をかけ、5月11日の朝に網を上げたところ、なかにカミツキガメが入っていたとのことでした。このカメは甲羅の長さが32cmもある比較的大型の個体でした。

カミツキガメは、北米東部(カナダ南部からアメリカ東部)から南米北部太平洋側(コロンビア、エクアドル)に分布する種で、もともと日本には生育していません。ペットなどとして日本に持ち込まれ、逃げ出したり捨てられたりした個体が、時々捕獲されて新聞等をにぎわせており、日本国内で繁殖しているのではないかと心配されています。本種は特定外来生物として指定され、飼育、販売、譲渡、野外に放すことが原

則として禁止されています。

ペット等を飼育する場合は、捨てない、最後まで面倒をみるなど、マナーを守って飼育してください。

(教育課 早瀬長利)



菅生沼で捕獲されたカミツキガメ

トピックス

○国際生物学オリンピック選手がやってきた！

筑波大学を中心とした筑波研究学園都市で平成21年7月12日から19日まで開催された第20回国際生物学オリンピックに参加した56か国200名を超える選手が、平成21年7月15日（水）に当館を訪れました。

選手たちは、常設展示見学、企画展ガイドツアー、落ち葉のしおりづくりを体験しました。常設展示見学では、世界最大級の植物食恐竜で全長26mのヌオエロサウルスの全身骨格標本の大きさに驚き、また第3展示室にある土の中の生きもの100倍ジオラマでは、自分が小さな生きものになった感覚を楽しんでいました。当館学芸員が見どころを紹介した企画展ガイドツアーでは、生きたカブトガニに目を奪われていました。また、全長27mの竜脚類恐竜ディプロドクスの全身骨格標本やその足跡などから当時の生物のようすを想像していたようです。落ち葉のしおりづくり体験では、落ち葉で顔や花のかたちをつくるなど、自分だけのオリジナルしおりをつくって楽しんでいました。

選手たちは生物学オリンピック期間中のつかの間の休息を楽しんだようでした。（企画課 尾花義幸）



当館職員の内案内で企画展を見学する選手たち

○海の日特別イベント開催！

海の日にちなんで海の生きものに親しんでいただくこと、平成21年7月20日（月）、恒例の『海の日特別イベント』を開催しました。今年は「海の生きものタッチングプール」「三葉虫のレプリカをつくろう！」「貝殻で海の生きものをつくろう！」の3本立て。三葉虫といった古代の生物からトラザメなど現代の生物まで、みたり触れたりつくったり、さまざまな形で海の生きものに親しんでいただきました。

当日は夏休みに入ったばかりとあってか、家族連れの姿が多く見受けられました。イベント会場では、ヒトデやアメフラシ、トラザメやその卵殻らんかくに興味深そうに触れたり、三葉虫は1万種もいたという説明に驚きながら、そのレプリカをつくったり、貝殻を材料に魚やカニの形のキーホルダーをつくったりと、皆さん楽しそうにすごしていました。子どもたちの笑顔はもち

ろん、それ以上に夢中になっているお父さんやお母さんの姿も印象的でした。

今後もさまざまなイベントをとおして、皆さんと一緒に楽しい博物館をつくっていきたいと思います。

（企画課 谷田部順子）



海の生きものタッチングプール

○中学生職場体験研修

今年の夏は県内の5つの中学校から15人の元気な2年生が当館を訪れ、平成21年7月23日と8月5～7日の計4日間、学芸員や展示解説員、ボランティアのさまざまな仕事を体験しました。

はじめに展示解説員の朝礼に参加し、声の調子を整えるための発声練習を行いました。次にエントランスや菅生沼ゲートで看板を出すなど開館の準備をし、大勢のお客様を迎え入れました。最初は戸惑いがちだった生徒たちもコツをつかんできたのが、声のかけ方や表情に変化が出てきて緊張が徐々にほぐれてきた感じがわかりました。ほかには野外での整備作業、水系展示での魚のエサの準備、ボランティアの化石クリーニングや自然発見工房での器具の貸し出しの補助をしました。収蔵庫や展示室の水槽のバックヤードなど、普段は入ることのできない施設を見学し、資料や生きもの取り扱いについての大切さを学んでいました。

短い間でしたが、この体験で感じたことや考えたことをこれからの学習や生活に生かしてくれることと期待しています。（教育課 木村正和）



生き物の世話をする研修生

カボチャとトウモロコシ～夏野菜の成長日記～



種まきから畑の手入れ、そしてたくさん収穫がありました

カボチャとトウモロコシの種まきから収穫までを体験するとともに、その成長を日記に記録していく友の会イベント「農業体験連続講座（全5回）」が、5月16日から8月8日にわたり実施されました。一家族で、トウモロコシは種を約100粒、カボチャは苗を約5株植えました。そのほとんどが立派に成長し、第4・5回目の講座日である7月25日と8月8日に収穫することができました。

ひげ（絹糸）が褐色化したトウモロコシを茎からもぎ取り、付け根部分が白くなったカボチャを成り元のつるから切り取りました。参加した会員の皆さんは、トウモロコシを生で食べたり、自分の顔とカボチャの大きさを比べたり、楽しそうに収穫していました。また、「草取りや間引きなどの手入れが大変だった。こ

れからは食べ物を大切にしていきたい。」「生で食べたトウモロコシは甘くてみずみずしかった。カボチャもはやく食べたい。」などの感想があり、今回の講座の目的である、野菜を育てる大変さや楽しさ、自分で育てた野菜のおいしさを感じてもらえたようでした。

当館では、平成21年10月10日（土）から第47回企画展「わんだふる・ベジタブルー野菜王国がやってきたー」を開催します。多くの方に野菜の魅力を知っていただきたいと思います。（企画課 尾花義幸）

編集後記

まだ暑い日が続いていますが、ときおり風に秋の気配を感じることもあるようです。さて、秋と言えば、食欲の秋、みのりの秋です。そして当館の次回の企画展のテーマは野菜。野菜の不思議をみて、学んで、驚いて、その後に野菜たっぷりのおいしいご飯を食べて、賢く健康になっちゃいましょう。（S.I.）

【交通案内】



- 常磐自動車道谷和原ICから20分
- つくばエクスプレス守谷駅下車
～関東鉄道バス「岩井行き」又は「猿島行き」乗車
～「自然博物館入口」下車、徒歩5分
- JR柏駅で東武野田線乗り換え、愛宕駅下車～茨城急行バス「岩井車庫行き」乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩10分



【開館時間】

午前9時30分から
午後5時まで
(入館は4時30分まで)
※ペット及び遊具等のお持ち込みはご遠慮ください。

【入館料】

区分	本館・野外施設		野外施設のみ	年間パスポート
	企画展開催時	通常時		
大人	720円 (580円)	520円 (420円)	200円 (100円)	1,500円
高校・大学生	440円 (300円)	320円 (200円)	100円 (50円)	1,000円
小・中学生	140円 (70円)	100円 (50円)	50円 (30円)	300円

(注):()内は団体料金(20名以上)

未就学児・満70歳以上の方・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。次の日は入館料が無料です。

- 5月4日(みどりの日)
- 6月5日(環境の日)
- 11月13日(茨城県民の日)
- 春分の日
- 高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日(ただし、春・夏・冬休み期間中を除きます。)

【休館日】

- 毎週月曜日
- 9月21日(月)～9月23日(水)は開館し、24日(木)が休館となります。
- 10月12日(月)・11月23日(月)は開館し、翌日が休館となります。
- 12月28日(月)～1月1日(金)は、休館となります。